

明治時代の 生活に学ぶ

第3回

衣服をめぐる「和」と 「洋」の相克・融合

—豊かな文化の構築に向けて—

難波 知子 Namba Tomoko お茶の水女子大学基幹研究院准教授

博士(学術)。専門は、近代日本の学校制服史。著書に『近代日本学校制服図録』(創元社、2016年)、『学校制服の文化史』(創元社、2012年)など。「明治150年」関連施策推進ロゴマーク審査委員。



明治時代には洋服が導入されますが、その一方で「和服」という概念や分類が生まれ、伝統化されていきました。和服とは古いものがそのまま伝わっているのではなく、外来の洋服と比較・対照されながら、共にかたち作られてきた文化といえます。そして衣服をめぐる「和」と「洋」の関係は、対立したり融合したりしながら、私たちの衣生活や服飾文化を豊かに育んできました。第3回は衣服の「和」と「洋」に焦点を当て、明治時代の変化と現代への展開をみていきたいと思います。

「和」「洋」のダブルスタンダード

洋服は明治の初め頃、社会制度や身分の再編成に伴い、軍服や礼服、各種職業服から導入されました。これら男性が着る洋服に対して、女性の洋服は鹿鳴館時代の欧化主義政策のもと、皇族や華族など、主に上流階層の女性たちによって着用され始めます。洋服は公的な行事で着用する正式な服装として制定されましたが、当時大変高価なものであったことから、一般の人々に広く着用されることはありませんでした。したがって、洋服というと「偉い人」が着るものというイメージが持たれていました。

一方、官位や爵位を持たない一般の人々は改まった場面で、男性は紋付羽織袴もんつきはおりはかま、女性は白襟しろえり紋付もんつきを着用するようになりました。男性の羽織袴は、江戸時代には礼服ではありませんでした

が、明治時代になって燕尾服えんびふくに代用される礼服として位置づけられていきます。このように、洋服にに応じて和服の礼服も整備され、和式と洋式の2つの基準が形成されていきます。ただし、明治時代には国が洋服を正式な服装とし、和服はその代用と位置づけたために、「和」と「洋」の関係は対等なものではありませんでした。

改良服の模索と 「和」「洋」の折衷文化

腕や脚など身体に沿ってかたち作られる洋服は、和服に比べて動きやすい特長がありました。洋服が軍服から導入されたのも、機能性が高く評価されたからです。それに対し、和服は足元まである長い裾が脚部を覆うため、歩行の妨げとなったり、帯や紐ひもが胸部を圧迫し、内臓の働きを悪くしたりする点が批判されました。明治時代には、洋服の普及が促される一方で、和服の改良も課題となっていきます。また、女性の洋服にはウエストを締め付けるコルセットの弊害が指摘されており、そのまま日本人女性が着用することには批判がありました。お手本となる洋服にも欠点があったのです。

そこで、和服や洋服の欠点を取り除いた新しい衣服(改良服)が模索されていきます。医学的な知識を持った男性の医師や裁縫に詳しい教育者などが、機能的で健康的な衣服のデザインを発表しました。改良服の考案に当たっては、欧

平成30年(2018年)は、明治元年(1868年)から起算して満150年に当たることから、政府では、「明治150年」関連施策を推進しています。その一環として本誌では、明治時代を生きた人々の暮らしを振り返り、現代の暮らしを展望します。 <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/meiji150/portal/>

米だけでなく中国や韓国など、さまざまな国や地域の衣服が参考にされました。さらに、日本古代の衣服もアイデアを練るための材料とされます。世界中の衣服や歴史上の様式を探り、その長所を組み合わせ、優れた衣服を作ろうとしましたが、結果的に改良服は広く普及しませんでした。理論はすばらしくても、それを人々が着てみたいと思うかどうかは別問題なのです。

多くが失敗に終わった改良服の中で、唯一の例外といえるのが、女学生の袴はかまです(図)。女学生の袴は、明治になって男性の指貫さしぬきと宮中女性の緋袴ひはかまを折衷して考案され、明治30年代に女学生の制服として広く普及します。女学生の間には袴に対する憧れや着用願望が持たれたことが、広く普及する原動力となりました。袴の素材には洋服生地に使用する毛織物が用いられ、女学

生の袴は「和」と「洋」の要素が融合されました。また、袴以外にも頭髮にはリボン、履き物には黒の革靴などが組み合わせられ、和洋折衷のハイカラなスタイルが形成されます。積極的に変化を受け入れる女学生たちの姿勢が、「和」と「洋」の融合文化を育んだといえます。

洋服の普遍化、和服の伝統化

洋服は大正末から昭和にかけて、一般の人々にも広く普及していきます。女性の洋服は、第一次世界大戦を契機にコルセットを廃した機能的なモードが欧米で確立し、日本にも伝わってきます。コルセットの弊害がなくなった洋服は、女学生や職業婦人の中で着用され始めました。老若男女すべてに洋服が行きわたるのは第二次大戦後になりますが、洋服は日常着として私たちの暮らしに定着していきます。もはや「外来の」とか「西洋の」衣服であるという意識は、ほとんど持たれていないでしょう。

一方の和服は、日常着としての性格を失った代わりに、晴れ着として七五三や成人式、結婚式などで着用され、現在に継承されています。大正時代には、「和」と「洋」の二重生活が無駄とされ、洋服への一元化が叫ばれましたが、昭和に入りナショナリズムが高揚してくると、和服を再評価する声が高まりました。明治時代には批判の対象であった長い裾や長い袖は、洋服にはない和服独特の美しさとして見直されます。このように、和服は洋服と比較・対照されながら価値づけられ、着用機会は少なくなったものの、豊かな文化を築いてきました。しかし、日常生活とは乖離かいりしてしまったこともあり、和服の着方やメンテナンスの技術はうまく継承されず、業者任せになっています。今後どのように「和」と「洋」の関係を築きつつ、豊かな文化を継承していくかは課題でしょう。

図 明治35年(1902年)頃の女学生の制服



資料：お茶の水女子大学所蔵

第4～6回は、食に関する話題を紹介します。